

(3) 土壌及び地盤の状況

1) 土壌に係る環境の状況

京都府では、「農用地の土壌の汚染防止等に関する法律」（昭和45年法律第139号）に基づいた土壌環境基礎調査を、昭和54年度から平成10年度まで府内の農用地を対象に実施している。「平成13年度版京都府環境白書」によると、調査対象となっているカドミウム、銅、砒素、亜鉛、鉛は府内のいずれの地点でも、同法の定める基準値を上回った濃度は検出されていない。

また、平成13年度に本組合が長谷山清掃工場及び折居清掃工場周辺で実施した土壌中のダイオキシン類濃度測定結果を表2-2-1.21に示す。これによると、いずれの地点でも環境基準値を下回っている。

なお、「平成13年度版京都府環境白書」によると、京都府が平成12年度に実施した土壌中のダイオキシン類測定結果では、宇治市内で0.0051pg-TEQ/g、城陽市内で1.1pg-TEQ/g、宇治田原町内で8.1pg-TEQ/gといずれも環境基準値を下回っている。

表2-2-1.21 事業予定地周辺の土壌中ダイオキシン類濃度測定結果

測定地点	土壌中ダイオキシン類濃度	環境基準値
宇治市内	2.6 pg-TEQ/g	1,000 pg-TEQ/g 以下
宇治市内	0.16 pg-TEQ/g	
城陽市内	0.59 pg-TEQ/g	
宇治田原町内	1.9 pg-TEQ/g	
長谷山清掃工場用地内	40 pg-TEQ/g	
折居清掃工場用地内	6.2 pg-TEQ/g	

注：数値は平成13年度測定結果
資料：城南衛生管理組合（平成14年）

2) 地盤の状況

事業予定地周辺の地盤は、主に沖積堆積物及び洪積堆積物で構成されており、粘性土、砂質土、礫質土等の互層で構成された場所が多い状況である。

京都府では井戸本数・地下水揚水量実態調査（平成元年度実施）を行っており、その結果を表2-2-1.22に示す。

これによると、宇治市が井戸本数142本、揚水量95,363m³/日、城陽市が井戸本数410本、揚水量106,436m³/日となっており、その主な用途は農業用や工業用等である。

事業予定地の位置する城陽市では、「地下水採取の適正化に関する条例」（平成9年城陽市条例第5号）を定め、井戸の新設あるいは掘替等を行う場合、公共用水道水源井への地下水の影響に配慮した取水規制を、市全域を対象に行っている。特に、公共用水道水源井の周辺600m以内の範囲は第1種規制地域として指定し、新設井戸の深度や口径を厳しく規制して、地下水揚水を制限している。（第1種規制地域は前出の図2-2-1.4参照）

表2-2-1.22 宇治市、城陽市での井戸本数・地下水揚水量実態調査結果

市	井戸本数(本)	揚水量(m ³ /日)
宇治市	142	95,363
城陽市	410	106,436

資料：「平成9年度版京都府環境白書」（平成9年、京都府）

(4) 地形及び地質の状況

1) 一般的な地形の状況

事業予定地周辺における地形を図2-2-1.6に示す。

事業予定地は、いわゆる宇治丘陵にあり、人工改変地を含む緩やかな丘陵地の西斜面の頂部付近に位置している。事業予定地の北に位置する笠取・喜撰山山地は、ほぼ小起伏山地ではあるが、その東側には標高505mの大峰山があり、傾斜は急となっている。事業予定地の南には鷲峰山山地があり、小起伏山地となっている。また、宇治丘陵の西には木津川周辺に氾濫平野として木津河谷低地が広がり、平坦な地形となっている。

2) 一般的な地質、堆積物の状況

事業予定地周辺における地質を図2-2-1.7に示す。

事業予定地周辺の宇治丘陵は、粘板岩、頁岩を主体とする古生層を基盤とし、これに礫・砂を主体とする鮮新更新統（鮮新更新世の地層）が重なっている。古生層は、粘板岩・頁岩の他、砂岩、チャート等で構成されており、鮮新更新統は礫、砂礫等のほか、一部、粘土層も含まれている。事業予定地は、これらの地層のほかに、盛土や埋土等も分布している。

現地踏査の結果によると、事業予定地周辺は広域にわたって砂礫層が分布しており、なかでも丘陵地の中・下部で砂礫層、上部で砂層（一部シルトを含む）が多くなっている。「滋賀県南部地域地質図」（昭和55年他、建設省）を参考にすると、事業予定地を含む丘陵地の上部の砂層は明星が原砂層、南西部から中部にかけての砂層・砂礫層は城陽礫層 及び に相当すると考えられ、全体として表層部は透水性の大きい砂礫層が卓越した状況である。

「長池演習場内障害防止対策工事長谷川砂防工報告書」（昭和59年、城陽市）等の既存資料に基づく地質性状図等を参考にすると、事業予定地の位置する長谷川上流域は、比較的浅い深度に基盤岩（頁岩、砂岩、チャート）が分布し、その深度は南西側に向かって深くなっている。この基盤岩の上に厚く砂礫層が堆積し、一部には粘土層も分布していると考えられる。また、地層は南西方向へ傾斜しており、地下水も表流水の流下方向と調和して南西方向へ流下しやすい構造となっている。